

通 教 月 報

診 療 情 報 管 理 研 究

令和 4 (2022) 年 5 月号

編 集 武田 隆久  
発 行 人〒102-8414 東京都千代田区三番町 9-15  
一般社団法人 日本病院会 教育部教育課  
TEL 03-5215-6647 (受講生専用)  
FAX 03-5215-6648 (受講生専用)  
URL <https://jha-e.jp/>受付時間 10:00~17:00  
(ただし、土・日・祝祭日、年末年始は除く)

発 行 日 毎月 1 日



## データに基づく医療の質向上に向けて

荒井 康夫

日本診療情報管理学会 副理事長 / 日本診療情報管理士会 副会長  
北里大学病院 診療情報管理室 特別専門職

「Data Rich and Information Poor」(DRIP、“データが豊富でも情報は不足している”)というフレーズは、1983年にベストセラーとなったビジネス書“*In Search of Excellence*”で提唱され、日本診療情報管理学会の前理事長である大井利夫先生が本邦に紹介された概念である。これは情報の利活用が不十分な組織を説明している。診療情報の電子化は進展しているが、情報の利活用の問題は、未だ解決されたとは言えないと思う。

本邦の医療は、超少子高齢化を背景に、医療費抑制と効率化が重要な課題となっている。厚労省「令和2年簡易生命表の概況」は、2020年の日本人の平均寿命は、男性 81.64 歳、女性 87.74 歳に達し、世界の主要国の中でも高い保健福祉水準にあると報告している。一方、OECD Health Data 2021 は、医療提供体制の異なる国々での比較ではあるが、本邦は諸外国に比べ、人口あたりの病床数が著しく多く、1入院あたりの平均在院日数は 16 日と長くなっている。これらは、本邦特有の医療費増加の要因と考えられている。

医療費抑制が求められる中、医療の高度化・複雑化、医療ニーズの多様化にも対応しなければならない。今後、医療の安全性と効率性を着実に高めていくためには、データに基づく医療の質的向上を推進していく必要があるだろう。これを支えるデジタル基盤の整備が進むことが期待される一方、蓄積されたデータをもとに医療の質を可視化(評価)し、改善を推進する人材の確保が喫緊の課題となっている。そのため、診療情報管理士にもその役割を期待する声は大きい。

記録作成や情報管理を目的化することなく、質の高い医療を提供し続けるために、DRIPの解決に取り組む時ではないかと思う。また、診療情報管理士の認定取得がゴールではなく、医学・医療や情報技術の進歩のスピードに遅れをとることなく、知識を増やし、技術を磨く必要がある。診療情報管理士は、日本診療情報管理学会の研究発表や生涯教育研修会を通じて、新しい知識を得ることができる機会がある。日々の実務的な問題については、日本診療情報管理士会で全国の診療情報管理士と対応策を情報交換することもできる。そうして、診療情報管理士は、必ずや自らに向けられた期待に応えられると思う。



一般社団法人 日本病院会